

## 根間先生に贈る言葉

成 田 雅 彦

平成 24 年度をもって根間先生が専修大学をご退職になる。英語教育を通じて、また LL 室長までも務められて専修大学に多大な貢献をされてきた先生のご退職に際し、まずは型通りお祝いを述べるのが筋であろう。しかし、入職以来 20 年以上も同じ学部の後輩としてお世話になってきた身には、寂しいという思いばかりが強い。教授会の後など、時々ご一緒させていただき一杯やるのが楽しみだった僕は、何かわからないことがあると「今度、根間先生と会った時に訊いてみよう」などと思うのが常だった。それがもうかなわないとなるとある戸惑いを感じないではいられない。思えば、根間先生とは一緒にいて実に安心できる方であった。先生といるとそこにゆったりとした時間が流れ始める。先生が沖縄のご出身のせいもあるのだろうか。その的確な助言、ゆっくりとした語り口や物腰にどれくらい助けられてきたろうと今になって思う。その先生が専修からいなくなってしまう。本当に寂しいことだ。

平成のはじめ、専修の英語教師になったばかりの僕は、多くの教員がそうであるように出版社から送られてくる教科書の見本を頼りに教科書を選んで授業をしていた。これも多くの教員に当てはまると思うのだが、そうして選んだ教科書は、授業をやってしばらくすると選んだことを後悔することが多い。不備が目立ったり、学生たちのレベルとそぐわなかったり、単純に内容がつまらなかったり、というのが後になってわかるのだ。しかし、そんな教科書の中に、不思議に使いやすい一冊があった。誰が書いた教科書なのか気にもしないで使っていたのだが、それが根間弘海という先生の手になるものであり、その方が自分のいる経営学部の同僚の先生であるということを知っ

たのは、うかつにももう前期も終わる頃であった。調べてみると、根間先生は、実に多くの大学英語教科書、また英語教材を書いておられる先生であった。ほとんどどの出版社のカタログをみても先生の名前が出て来るというほどの数である。というわけで、僕の根間先生の刻印付けは、まず、英語教科書分野のエキスパートとして行われたのである。

しかし、実は、根間先生とは、英語音韻論の大家なのであった。専修に来られる前は、国立大学の英文科の教授であったし、立派な音韻論の専門書を出され、立教の文学部などでも音声学を教えておられた。その後、親しくお話しさせていただくようになってから、「学問の進歩について行くのは大変だよ、半年、一年と気を抜いたらもうついて行けないね」と伺ったことがあった。分野は違うものの自分も気を引き締められたことを覚えている。あるいは、毎朝、大学に出て来る前にご専門の論文を一本は必ず読んでくる、というお話などを伺って、自分の不勉強を反省させられたりもしたものだ。ただ、根間先生という方は、そういうことをけっして高所から語るということとはされない。「朝、早く自宅を出て車で大学に向かう途中、例えば、ロイヤル・ホストに入って朝食を食べる。そのあと、コーヒーを飲みながら論文を読むんだよ」などと言われるのだ。聞いている側は、リラックスした雰囲気勉強されているんだな、などと思うのだが、実はその背後には、まさに根間先生の学者魂としか言いようのないものが隠されているのだということの後には僕は知るようになった。

先生のご研究は、英語音声学や英語一般から、大相撲研究に大きくシフトしていった。もともとは、相撲を海外に英語で紹介したいというお気持ちから始まったと伺った記憶がある。しかし、根間先生にとって、相撲とはまさに日本の象徴的な文化儀礼のごときものであり、それを通して日本をご研究なざりたいという思いもあったようだ。いまや二時間もあれば東京から飛行機で飛んでいくことができる沖縄であるが、その故郷をいつも心の中で大切にされている根間先生はそこから日本というものを見つめたいという思いもおりだったのであろう。先生の学者的追求は、この分野でも飽くことを知

らないようであった。吉川弘文館から出版された『大相撲行事の世界』(2011)や33代木村庄之助と共著で英宝社から出された『大相撲と歩んだ行司人生51年』(2006)など数冊の相撲関係のご著書は、今や、この分野での貴重な基礎文献と見なされているものであり、専修大学の紀要を中心に発表された多数の相撲関係のご論文とともに先生を相撲研究の第一人者に押し出した業績である。また、これは、今後、様々な形でのご発展を期待したいが、根間先生は、キリスト教やユダヤ教に関するご造詣も深く、幾度かイスラエルを訪れられて調査などもなさっている。分野は様々ではあれ、そこに一貫して感じられるのは、根間先生がまさに学者としか言いようのない方であり、その学究心の赴くままに大学教員としての生活を歩んでこられたということである。僕などは、そこに大学教員としての一つの模範を見る思いがする。

数年前、先生と大相撲観戦をしたことがあった。四人で栈敷席を取り、土俵のすぐ近くで相撲を見た。力士のことだけではなく、相撲界のあらゆることについて先生に解説していただき、僕は、普段何気なくテレビで見ただけの相撲の世界が、意外な奥行きと複雑な側面を持って今日まで引き継がれていることをわずかではあるが感じる事ができた。根間先生は、何人かの行司の方とも親しく相撲部屋ともつながりをお持ちなので、そのお話はインサイダーならではのものもあつたと思う。お話を伺いながら、僕は、この世界と学者としてかかわるようになった根間先生という方のことを考えたりしていた。その後、ちゃんこ鍋を囲みながら、角界の話はさらに続いた。先生は嬉しそうであった。しかし、きっとあの日も、行司の格好や土俵の形などを見て、新たな学問的ヒントを得られていたに違いない。大学を退職されても、おそらくそれはずっと続いていくことだろう。根間先生のご健康と、ますますのご健筆を祈りつつ、拙稿を終わりたい。先生、いろいろお世話になりました！